

フレデリック・ダグラスにおける抵抗の可能性

信州大学人文学部助手 小谷 一 明

序

酒井直樹によれば、主体が客体との関係において差異を認め、その差異を表象した時点で主体は同時に主観となる。¹主体は、その表象において主体と客体の関係性を外側から（客観的に）見るという立場を装う。実際には、主体はその関係性を構成する一部であり続ける意味で、客観的な観察の場には立ち得ない。例えば旅行者が見知らぬ土地を訪れ、現地人やその文化を表象する場合、主体は現地人との関係を築く存在であるにもかかわらず、自らを観察空間から消去しつつ現地人の空間を「客観的に」描いていく。このような差異の表象方法は、他者を自己との関係で表象しているに過ぎない。その意味でこの表象は自己の自己への提示（re-presentaion）である。

こうした主体の立場性をめぐる考察は、フレデリック・ダグラス（Frederick Douglass）の3つの自伝を読む場合、ダグラス自身の主体を考察する手助けになると思われる。ダグラスは奴隷制度のもとで主人（奴隷所有者）と奴隷の関係を構成する主体であった。その一方で、自伝はその関係を「客観的に」記述していく。この記述は、必ず遡及的に時間を並べ替える。自伝の時間性は、歴史そのものの属性である過去から現在、そして未来への連続的な時間の流れと全く関係を持たない。過去の出来事は、たとえ同時代的な記述であっても常に遅れて描かれる。

このようにして見ていくと、過去の記述（歴史記述）は物語と同じように、書き手により再構成された「事実」の記述であることがわかる。ダグラスが自分の経験を語る場合においても、それは主観的な記述となる。つまり事後的に、逃亡が成功している時点から過去を振り返るため、体験はダグラスの書く時点に影響を受ける。逃亡からわずか7年後の1845年に出版された自伝『フレデリック・ダグラス、あるアメリカ奴隷の生涯』（*Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave*）においてさえ、ダグラスの記述はその影響を免れない。

ダグラスの3つの自伝を読むと、語り得る事実と語り得ない事実がはっきりと区分されていることがわかる。例えば1855年の自伝『我が隷属、我が自由』（*My Bondage and My Freedom*）においては誰が逃亡計画を裏切ったのかという事実が、1892年の自伝『フレデリック・ダグラス、我が人生と時代』（*Life and Times of Frederick Douglass*）においてはどのような手段で逃亡を成功させたのかという事実が、隷属状態にある仲間の不利になるといった理由から1845年の時点では削除されている。作者は常に書く時点での社会的文化的状況に拘束されており、書き手の現在に応じて内容は削除されたり加筆されたりするのである。

その中でも、南北戦争以前の2つの自伝と奴隷制度が廃止された後での自伝では、書き手の現在が大きく異なる。ダグラスにとって最初の2つの自伝は、奴隷廃止を期待する記述となっている。奴隷解放という「未来」のために、過去は収集、再構成されているのである。さらに南北戦争以前の2つの自伝の間にも、ダグラスの記述の仕方には大きな違いが認められる。

But my readers are, probably less concerned about my opinions, than about that which more nearly touches my personal experience; albeit, my opinions have, in some sort, been formed by that experience. (248)²

1855年の自伝においてダグラスは、北部の読者がダグラスの経験ばかりを聞きたがり、奴隷制度に関する意見にはあまり関心を寄せてくれない状況を訴えている。読者の関心は、奴隷制度ではなくそこで起こる出来事であった。1845年の自伝でダグラスは、読者に対し体験を報告するように務めている。(18) この自伝は、ダグラスの意見よりも体験という事実を優先するという観点から書かれ、そのため読者の関心を満たすものとなった。これによりダグラスは、奴隷廃止主義者の寵児となるにとどまらずアフリカン・アメリカンの「代表的人物」(Representative Man) となっていく。³しかし上記の引用からも分かるように、1855年のダグラスは、自己の体験だけではなく奴隷制度についての関心を読者に展開しようと考えている。この観点から、ダグラスは1845年の自伝を書き直していく。

本論では、1855年の自伝における加筆修正の跡をたどることで、南北戦争直前のダグラスが、奴隷廃止をどのように進めていこうと考えていたのかを明らかにしたい。またその見解に基づきどのように体験事実を再構成していったのかも、併せて論じられていくことになる。また、ダグラスが奴隷制度に対しどのような抵抗運動を示そうとしたかを明らかにしたい。

1. 2つの自伝をめぐる奴隷体験と奴隷制度

フレデリック・ダグラスは、メリーランドのタルボット郡で奴隷として生まれる。タルボット郡の生活空間は、コロンネル・エドワード・ロイド (Colonel Edward Lloyd) の「大農園屋敷」(the Great Farm House) を中心に構成されている。奴隷所有者の屋敷に対し、ダグラスら奴隷の居場所は「園外」(the out-farms) と呼ばれる空間であった。(23) ⁴その園外の中でもとりわけ人里離れた空間で、ダグラスは祖父アイザック・ベイリー (Isaac Baily), 祖母ベッツイー (Betsey Baily) と幸せな生活を送る。⁵祖母は、まだ働く年齢に達していない奴隷の子供を育てる仕事を任されていた。ダグラスは過酷な奴隷の生活からは「切り離されて」いたと述べている。(142) ただし、ダグラスが奴隷制度の影響を受けなかったというわけではない。ダグラスにとっては母の不在が奴隷制度によってもたらされている。奴隷制度の慣習から、奴隷の子供は母親から生後すぐに引き離された。この慣習は、ダグラスの母に対する記憶そして愛情をなくしていく。母とは数度会っているが、母の死を伝え聞いてもさしたる動揺を覚えなかったと述べている。(157) ダグラスは過酷な奴隷社会から隔離されていたが、奴隷制度の影響は、母の不在をとおしてダグラスを取り囲んでいたの

である。

ダグラスが8才の頃に、祖母との幸せな生活は終わりを向かえる。家事や雑事を行う奴隸 (houseboy) として、ダグラスは最初の主人であるアンソニー・オールド (Anthony Auld) のもとへ引き渡される。アンソニー、息子のトマス・オールド (Thomas Auld)、そして最初の妻ルクレティア (Lucretia) のもとで、幼少のダグラスは生活を送ることになる。それまで認識されていなかった「奴隸制度の現実」(173) が、眼前に現れる。メリーランドの奴隸制度は、深南部ジョージア、アラバマ、ルイジアナとは異なり、一般には北部自由州の影響を受けた温和なものと考えられていた。しかしタルボット郡は北部の影響から切り離された場所 (out-of-the-place) にあるとダグラスは述べている。(158) ⁶ダグラスはロイド農園を過酷な奴隸制度の空間に仕立て上げているが、この説明は1845年の自伝にはない。祖母との生活空間との比較の中で、「奴隸制度の現実」の目撃は劇化される。

最初の目撃は「大農園屋敷」であった。奴隸所有者ロイドの豪邸は、ダグラスにとっては贊嘆の場所である。(146) 年輩の奴隸たちも、支給される食料を取りに屋敷へ出向くことを大きな誇りとしていたとダグラスは述べている。(183) しかしこうした感情も、体罰の目撃から次第に変化する。(150) ダグラスは二人の叔母が激しくむちで打たれたことを知る。とりわけ叔母エサー (Aunt Ether) の場合は、ダグラスが初めて目の当たりにした体罰であった。ロナルド・タカキ (Ronald T. Takaki) も述べているように祖母との生活が、ダグラスに「人間」としての意識を植え付けていた。⁷そのため叔母の体罰の目撃は、奴隸としての認識をダグラスにもたらしたと考えられる。目撃の後、作者ダグラスは「大農園屋敷」へ誇りを持って出かけていく奴隸の歌に、悲しみを読みとっていく。

"I am going away to the great house farm,
O yea! O yea! O yea!
My old master is a good old master,
Oh yea! O yea! O yea!" (184)

一見奴隸所有者に媚びるような明るい歌に思えるが、そこには深い悲しみがある。悲しみをこれ以上悲しい音色で歌うことに耐えきれず、せめてもの慰みとしてその対極である喜びの音色を選ぶのである、とダグラスは解説を付ける。(184) ⁸ダグラスは、奴隸であった時点で、この歌のメッセージを読みとれなかったと報告している。(184-85) つまり作者ダグラスは、奴隸ダグラスが感得した「大農園屋敷」のイメージを変えているのである。屋敷へお使いに行かされる奴隸の誇りを表す歌は、悲しみの歌となる。少年ダグラスにとって賛美の対象であった「大農園屋敷」は、「大農園屋敷に対する強い嫌悪感」へと変わる。(210-11)

1855年の自伝では、幼少期が奴隸制度に関わる数々の疑問の誕生とともに終わっている。「主従関係のなかった時代はあるのか、この主従の関係はどのようにして始まったのか」といった疑問である。(195, 205) 1845年の自伝で語られる奴隸制度に対する恐怖や嫌悪といった感情に、理性的な思考を促す問題提起が加えられている。1855年の自伝でダグラスは、奴隸体験を通じて奴隸制度そのものを考えるよう読者に促しているのである。

2. 抵抗と英雄

ダグラスはアンソニーのもとを離れ、バルティモアへ移動する。船大工のヒュー・オールド (Hugh Auld), アンソニーの義理の息子が、ダグラスの主人となる。ダグラスの仕事は、育児係や家事であった。妻ソフィア (Sophia) は、母親のように接してくれ、ヒューはダグラスを「比較的優しい態度」(comparative tenderness) で扱ってくれた。(258) ダグラスは「コロネル・ロイドの農園の奴隷と比べると、バルティモアの都会にいる奴隷は自由市民とかかわらない」と述べている。(218) ダグラスが移動したバルティモアや、途中のアナポリスの風景はタルボット郡と好対照であった。バルティモアの屋敷と比べると、「大農園屋敷」もありふれた家として目に映る。(210—11)

この地で7年ほど過ごすことになるが、ダグラスがアルファベットに興味を持ちソフィアに習い始めるまでは、ダグラスは「人間」として扱われていた。しかしダグラスの読み書き能力への憧れが、ヒュー・オールド一家との心地よい生活を変えてしまう。ソフィアがダグラスにアルファベットを教え始めると、ヒュー・オールドは妻に「奴隷制度の神髄」(the true philosophy of slavery) を説く。(217) 良き妻であろうとするソフィアは、結果的にダグラスを奴隷としてみなさざるをえなくなる。奴隷制度は次第にソフィアの行動を律し始めた。ダグラスはその「性質」において同胞であったソフィアが、奴隷制度によって性格を歪められることになり、怒りを覚える。奴隷制度が作り出す犠牲者は、奴隷だけではなくたのである。(228) ⁹ダグラスは体罰といった奴隷制度下での体験だけではなく、「奴隷制度」そのものも強く憎むようになる。

My feelings were not the result of any marked cruelty in the treatment I received; they sprung from the consideration of my being a slave at all. It was slavery — not its mere *incidents* — that I hated. (228)

奴隷ダグラスの奴隷制度に対する憎悪は、作者ダグラスの奴隷制度に対する理性的な考察へと連結していく。

The morality of *free* society can have no application to *slave* society. . . . [I]f he kills his master, he imitates only the heroes of the revolution. Slaveholders I hold to be individually and collectively responsible for all the evils which grow out of the horrid relation, and I believe they will be so held at the judgement, in the sight of a just God. Make a man slave, and you rob him of all accountability. (248)

[] は筆者による。以後も同じ。

逃亡に成功した時空間にいるダグラスは、北部自由州の「道徳」だけでは「奴隷社会」を変えることができないと考えている。タルボット郡をはじめとする奴隷州の道徳は麻痺状態になっているため (203), 奴隷制度の廃止を道徳的に訴えても耳に届かない場合がある。そ

ここでダグラスは奴隷制度に対する「革命」を正当化する。自然権を奪われたものが、奪い取った主人に抵抗することの正当性が主張される。(229-30, 248, 302)

ダグラスのバルティモア時代、ナット・ターナーが起こした反乱の衝撃はまだおさまりがっていなかった。奴隷廃止主義者の間では、「怒れる神」が奴隷州の白人にむちをふるおうとしていると噂された。(231) アメリカ独立革命(229-30)の「英雄」のように、ナット・ターナーも英雄として扱われるべきだとダグラスは考えている。その後ダグラスは、自分が「ナット・ターナー」と呼ばれた体験を報告している。ダグラスは、セント・マイケルズで他の奴隷のために日曜学校を始めていた。しかし奴隷に読み書きを教えることを嫌う奴隷の主人たちは、ダグラスの学校に突如押し入ってくる。そこで当時の主人トマス・オールドはダグラスに対し、「お前はナット・ターナーになろうとしてるのか」と聞く。(254) 1845年の自伝にこの問いかけは描かれていない。

1845年から10年後、「お前はナット・ターナーになろうとしてるのか」という問いを加筆することにより、ダグラスは自らを英雄に重ねようとした。この反乱に共鳴した奴隷ダグラスの「最大の関心は、世界を改宗させる」ことであった。(231) ダグラスのカヴィーに対する抵抗の場面から、奴隷制度廃止のためにダグラスがどのような方策を考えていたのか考察してみたい。

3. 抵抗の曖昧性

ヒュー・オールド一家に訪れた変化のため、ダグラスのバルティモアにおける生活は不快なものとなっていく。反面ダグラスは様々な形で未来への希望を沸き立たせることができた。ファーザー・ローソン(Father Lawson)との出会いは、宗教的な救いへの希望をかき立てた。「ストウ夫人のアンクル・トムを思い起こさせる」ローソンは、ダグラスに「素晴らしき来世」(a better world)の到来を信じるように諭してくれた。(232-33) また文字を習っていた白人の子供たちと、奴隷制度に関する意見を交換しあい、自由の身になれる望みを抱き始める。演説集「コロンビアン・オレイター」で奴隷が主人を改心させる話しや、政治抑圧を弾劾する文章を読む。(225-26) 波止場で出会った2人のアイルランド人から、自由になるため北部へ逃亡したらどうかと諭される。(233-34) 「バルティモア・アメリカン」という新聞から「アポリジョン」の意味を学び、北部の奴隷廃止運動家の記事を拾い読みする。(230)

バルティモアでの生活は突如終わりを向かえる。ダグラスの主人アンソニーが死亡したため、貸し出されていたダグラスは再度タルボット郡セント・マイケルズへ呼び戻される。父の死後主人となったトマス・オールドのもとで9ヶ月間仕えるが、主人の言うことを素直に聞かない奴隷として見なされる。奴隷が都市へ行くと、服従心を無くすと考えられていたためでもあった。(255-56) そこで1834年の1月、トマスはダグラスを「奴隷を飼い馴らす男」エドワード・カヴィー(Edward Covey)のもとへ1年間送り、ダグラスを従順な黒人(サンボ)に仕立て上げようと企む。そこで初めてダグラスは農場労働者(フィールド・ハンド)となるが、働き初めて3日目に激しい体罰を受ける。それから6ヶ月の間、ダグラスは牛のようにむちを打たれ続けた。精神的にもカヴィーはダグラスを調教しようとする。ガ

ヴィーはダグラスから見えない所で、「蛇」のようにダグラスの行動を監視する。¹⁰常に監視されているという意識のため、ダグラスは労働の手を休めることができない。ダグラスは精神的、肉体的に飼いやられていく。

I was broken in body, soul and spirit. My natural elasticity was crushed ; my intellect languished ; the disposition to read departed ; the cheerful spark that lingered about my eye died ; the dark night of a slavery closed in upon me ; and behold a man transformed into a brute ! (268)

ダグラスは「その精神的な経験を決して描けない」体罰を受け、「自由への希望など真っ当には考えられない奴隷」に飼いやられていく。バルティモア時代のような環境を全く取り除かれ、「隷属という忘却状態」へと引き戻される。(269)

「肉体、魂、そして精神」を奪われた「野獣」から「人間」に戻るため、ダグラスは抵抗しなければならなかった。ここでカヴィーとの衝突が起こる。カヴィーがダグラスに体罰を与えようとしたとき、ダグラスは「自己防衛のためだけに」抵抗した。(283) この抵抗は時に「殴打を見舞わざるをえなかった」。(286) 2時間ほどでカヴィーは、ダグラスにむちをふるうことをあきらめる。ダグラスは無傷であったが、カヴィーは流血していた。16才の子供にむちをふるえなかったという事実は、奴隷調教師カヴィーにとっては屈辱となる。ダグラスを調教するためには応援を求めなくてはならなかったが、調教師としての名声に傷が付くことを恐れたカヴィーは、以降ダグラスに対し「見て見ぬ振り」をする。このカヴィー事件は、「奴隷としての人生の転回点」となった。

[T]his battle with Covey . . . was the turning point in my "life as a slave" . . . I was a changed being after that fight. I was nothing before ; *I WAS A MAN NOW*. It recalled to life my crushed self-respect and my self-confidence, and inspired me with a renewed determination to be *A FREEMAN*. A man, without force, is without the essential dignity of humanity . . . After resisting him, I felt as I had never felt before. It was the resurrection from the dark and pestiferous tomb of slavery, to the heaven of comparative freedom. (286)

ダグラスは「力」の行使により自尊心を回復させ、「野獣」から「人間」の地位へと戻る。カヴィーはダグラスに対しむちをふるえなくなった。「奴隷がむちをふるわれなくなるとき、ほとんど自由の身に近い」。(286) これ以降、他の奴隷と異なり「白人に畏れられ」、読み書きの能力を備えたむちをふるいにくい奴隷となる。(288)

この場面をめぐるロバート・リーヴァイン (Robert S. Levine) は、ダグラスの抵抗を暴力と区別している。奴隷の主人が感情的に暴力を振るうのにたいし、ダグラスは自己防衛という闘い方によって、自己をコントロールした力の行使を見せつけている。¹¹これに対しフランク・カーランド (Frank M. Kirkland) は反論する。主人に対する奴隷の抵抗は正当なものであるとダグラスが述べているのだから、抵抗が感情的なものであってもおかしく

ない。さらに自己をコントロールできる状況なら、ダグラスはカヴィーに対し抵抗などしえなかったであろうと述べている。確かにリーヴァインは、奴隷制度の廃止が道徳的な説得だけでは達成できないというダグラスの見解や、主人の命令に黙って従う奴隷に対するダグラスの批判を軽視している。¹²しかしダグラス自身、自己防衛の抵抗と感情的な抵抗（暴力）との狭間で揺れ動いていたように思われる。カヴィー事件の後、ダグラスは自身の抵抗とは異なった種類の抵抗を提示する。

ダグラスは自らが開いた学校の3人の奴隷と逃亡を決行しようとする。しかし逃亡当日の朝、裏切りによりダグラスらは捕縛されてしまう。この際4人のうちヘンリー・ハリス (Henry Harris) は、保安官や主人に対し抵抗を示す。「おまえらは俺を一回しか殺せやしないんだ。撃て、縛られるぐらいなら撃たれたほうがましだ」と言いながら立ち向かう。(318) ハリスの抵抗は、ダグラスの抵抗とは異なるものであった。ダグラスの抵抗はある程度その効果を期待するものである一方、ハリスの抵抗は結果をかえりみない。

Henry put me to shame; he fought, and fought bravely. John and I had made no resistance. The fact is, I never see much use in fighting, unless there is a reasonable probability of whipping somebody. Yet there was something almost providential in the resistance made by the gallant Henry. But for that resistance, every soul of us would have been hurried off to the far south. (318)

1855年の自伝は、引用のようにヘンリーの抵抗について新たな説明を多く加えている。さらにヘンリーの抵抗を英雄的なものとするための、コンテキストが用意されていた。ハリスは、「自由を、さもなくば死を」と説いた白人の英雄パトリック・ヘンリー (Patrick Henry) と重なる。「パトリックの言葉は自由の身である人間の発言にしたって崇高なものであるが、もしむちと鎖に縛られた人間が実際そのように発言したら、その時は比べようもないほど崇高なものと感じられるはずだ」。(312) ダグラスはハリスの抵抗のために伏線を引いているのである。

しかしハリスの抵抗はダグラスに対し何の影響も及ぼしてはいない。ハリスの抵抗を賛美しつつも、ダグラスは自らの抵抗に関する今の考えを明らかにしている。「実際、誰かをひっぱたくという可能性がある程度無ければ、戦うことの意義をたいして見いだせない」。(318) 作者ダグラスにとっての抵抗は、あくまでも可能性の見えないものであってはならない。カヴィー事件では、ダグラスもヘンリーと同じような抵抗を示していた。主人に抵抗することの罪を知っていたので、「どうせ死刑になるなら子羊を盗むより親羊を盗んだ方がよい」という覚悟で戦っている。(284) それにもかかわらずダグラスは、戦うまえにある程度の見返りを計算していた。「ある程度の」(reasonable) 可能性という表現は、「理にかなった」可能性という意味でも読める。ダグラスは、以前ネリー (Nelly) の妻の体罰現場から1つの教訓を得ていた。「むちに打たれやすい奴隷は何度も打たれ、敢然と監督者に立ち向かう者は、最初はひどくむち打たれるが、最後には自由の身となる」という教訓である。(182) 実際ダグラスはこれ以降、むちをふるわれなくなる。ダグラスにおける抵抗は「力」の誇示であると同時に、カヴィーを「改宗」しようという意図を持つものである。一方ヘン

リーの抵抗は、「誰かをひっぱたく」可能性のない、「力」を誇示できない抵抗であった。

しかしヘンリーのような抵抗も、計算づくではないにせよ効果を持っている。結果的にダグラスらが深南部に送還されずに済んだのは、ハリスのおかげであったかもしれないと、1855年の自伝には記されている。ヘンリーの闘いは、ダグラスの自己防衛の闘いと異なり、ナット・ターナーの死を賭した闘いと結びついていく。英雄的な奴隷の反乱は、殉教者精神に満ちた「神懸かり的な」(providential)ものである。(318)ダグラスは、彼らの行為を素直に評価しながらも、自らはそうした抵抗に携わることができないという限界を表明している。ダグラスの抵抗は、あくまでも効果を考えた抵抗である。カヴィー事件の前に、サンディー(Sandy)はダグラスに、「書物の知識でカヴィーを君から遠ざけておくことはできなかった」と語る。「その当時は力強い意見」だったが、1855年の時点では「書物の知識」によって「世界を改宗する」可能性を認めている。(281)自由の身になった現在、ダグラスは道徳的な説得による抵抗と、英雄的な抵抗の双方が奴隷制度廃止にとっては必要であると考えているのである。

結 論

逃亡を試みたダグラスは、ヒュー・オールドのもとへ戻される。再度バルティモアの地に立ったダグラスは、最初の8ヶ月を造船現場で働くことになった。そこで自由黒人が白人の見習い労働者に襲撃される事件が起き、ダグラスも巻き込まれてしまう。この船で起こった暴力そしてダグラスの抵抗は、ダグラスにとってこれまでに経験したことのない種類のものであった。この抵抗は、奴隷所有者に対する抵抗ではない。白人にとって自由黒人は雇用マーケットにおける脅威であった。低賃金で白人同様の働きを見せる黒人は、白人から「奴らがこの国を乗っ取るだろう」と見なされた。(332)とりわけ経済状況の悪化に伴い、資本家は奴隷や自由黒人を労働者として雇おうとする。

奴隷であったダグラスは「形式上」この乱闘には関係ないはずであったが、黒人労働者として乱闘に巻き込まれてしまう。1855年の自伝において、ダグラスはこの乱闘を「奴隷制度と、南部白人機械工及び労働者の利害関係との衝突」と考え、白人までも奴隷化する奴隷社会を批判している。(300)¹³白人と黒人を一緒に働かせ、両者を競合させることで、資本家は労働意欲を向上させつつ賃金を抑える。奴隷制度の経済が資本主義経済と摩擦を起し始めるにつれて、主従関係も変容していく。「共同体の絡み合った物理的な力によって、私は奴隷だ」。(304)ダグラスにとっての抵抗は、もはや奴隷制度内だけのものではなかった。「奴に彼の(私の)お金を渡す」(hand his (my) money)という描かれ方からも分かるように、ダグラスの稼いだ賃金は自分のものとして意識化されていく。(344)労働者としての意識は、自己の労働により主人が潤っているのだから、奴隷に対して体罰を与えることは矛盾するという憤りへとつながっていく。

南北戦争以前のダグラスにとって、奴隷制度を含むアメリカは様々な抑圧を生み出していた。そのため多角的な抵抗を示さない限り、奴隷制度の悪影響を払拭することはできないと考えている。ダグラスが禁酒運動や女権運動に関わったのは、その理由の一つであろう。道徳感情に訴える奴隷廃止運動に参加しながらも、「革命」への憧れを捨てることができな

ったのは、「共同体の絡み合った物理的な力」に抵抗していたためである。

注

¹酒井直樹, *Translation & Subjectivity: On "Japan" and Cultural Nationalism* を参照のこと。主体と主観の関係及び歴史記述の論は、とりわけ第4章 "Subject and/or Shutai and the Inscription of Cultural Difference" を参考にしている。

²テキストにおける引用はすべて *Autobiographies: Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave, My Bondage and My Freedom, Life and Times of Frederick Douglass*. NY: Library of America, 1994. からのものである。本論で指摘がない限り、1845年の自伝と内容が一致しているダグラスの体験は、1855年の *My Bondage and My Freedom* から引用している。

³ダグラスがどのように「代表的人物」になっていったのかに関しては、ヘンリー・ルイス・ゲイツ (Henry Louis Gates) の "From Wheatley to Douglass: The Politics of Displacement" を参照のこと。ダグラスが登場したことで、それまでアフリカン・アメリカンの「代表的人物」であった詩人が表象の場を失っていく過程が論じられている。またロバート・リーヴァイン (Robert S. Levine) は, *Martin Delany, Frederick Douglass and the Politics of Representation Identity* の中で、マーティン・ディレイニーも「代表的人物」として見なされていたと論じている。

⁴1845年の自伝のみに見られる表現である。

⁵ロナルド・タカキは *Violence in the Black Imagination: Essays and Documents* において、祖母とパルティモアのソフィア・オールドとの生活が、後の奴隷制度に対する平和主義者の運動姿勢を産み出したと述べている。(18-21) ダグラスは、1840年代ウィリアム・ロイド・ギャリソン (William Lloyd Garrison) の奴隷廃止運動に参加し、道徳的な側面からの奴隷制度を攻撃していった。

⁶ロイドの農園が隔離されていたという説明は、1845年の自伝には書かれていない。ダグラスの奴隷状態がかなり恵まれていたのではないかという当時の思惑に応えるためか、55年の自伝ではこの点に加筆、強調されている。

⁷*Violence in the Black Imagination: Essays and Documents* を参照のこと。ロナルド・タカキは、祖母との生活が彼に1人の人間 (a person) としての自覚を与え、この自覚が「奴隷」という地位に対する抵抗を育む契機になったと述べている。(21)

⁸ゲイツは *The Signifying Monkey: A Theory of African-American Literary Criticism* において、奴隷社会における音と意味の関係を論じている。奴隷以外の者に誤読させるような、「反音韻構造」(antiphonal structures) を構築することで、奴隷たちは文化的「シニフィエ」(Signifier) を保持していったと述べている。(67)

⁹ダグラスは1855年の自伝で、最初の主人アンソニーも奴隷制度の犠牲者であっただろうと述べている。(171, 174) 1845年の自伝と異なり、ダグラスは奴隷制度を支持している白人に対しても奴隷制度廃止の呼びかけを行っているように思われる。

¹⁰カヴィーの調教は、奴隷の間にスパイをまぎれ込ませ主人の悪口を言う奴隷を探し出したり、逃亡をもちかけておいて賛同する奴隷を罰したりする策略と同じ性質のものである。(197, 234)

¹¹リーヴァイン, *Martin Delany, Frederick Douglass and the Politics of Representation Identity* の99-143ページを参照のこと。

¹²カーランド, "Enslavements, Moral Suasion, and Struggles for Recognition: Frederick Douglass's Answer to the Question — 'What is Enlightenment?'" の297-98ページを参照のこと。

¹³ジョン・ピットマン (John P. Pittman) は、この事件を19世紀前半におけるアメリカ市場社会と奴隷制度との間の歪みとして論じている。(74, 80) 市場経済が成長していく中で、奴隷制度が制度としてたちゆかなくなる一例である。

参考文献

- Douglass, Frederick. *Autobiographies : Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave, My Bondage and My Freedom, Life and Times of Frederick Douglass*. NY : Library of America, 1994.
- Gates, Henry Louis, Jr. "From Wheatley to Douglass : The Politics of Displacement" in *Frederick Douglass : New Literature and Historical Essays*. Ed. by Erick J. Sandquist. Cambridge : Cambridge UP, 1990. 47-65.
- *The Signifying Monkey : A Theory of African-American Literary Criticism*. NY : Oxford UP, 1988.
- Kirkland, Frank M. "Enslavements, Moral Suasion, and Struggles for Recognition : Frederick Douglass's Answer to the Question — 'What is Enlightenment?'" in *Frederick Douglass : A Critical Reader*. Eds. by Bill E. Lawson and Frank M. Kirkland. Oxford : Blackwell, 1999. 243-310.
- Levine, Robert S. *Martin Delany, Frederick Douglass and the Politics of Representation Identity*. Chapel Hill : U of North Carolina P, 1997.
- Pittman, John P. "Douglass's Assimilationism and Antislavery" in *Frederick Douglass : A Critical Reader*. 64-83.
- Sakai, Naoki. *Translation & Subjectivity : On "Japan" and Cultural Nationalism*. Minneapolis : U of Minnesota P, 1997.
- Takaki, Ronald T. *Violence in the Black Imagination : Essays and Documents*. NY : Oxford UP, 1993.